

まだ連帯じゃない

——8月ソウルに行ったこと

岡本朝也

ソウルの集會に一人で参加する

ソウルの地下鉄はホームも車両も大きく、大阪の地下鉄の1.5倍くらいの広さがある。それでも、A1サイズのボードに貼ったポスターと、トランクに詰め込んだ

1000枚のビラを持って乗るのは気が引けて、カンファムン（光化門）駅方面に向かう電車の中で、僕はドア脇のスペースに縮こまっていた。落ち着いてみると、電車は意外とすいている。2019年8月10日、午後4時半。夏の土曜日の夕方に地下鉄で都心の方に向かおうという人はそんなにいない。それでもポスターの「No Abe」と書かれた面は自分の側に向ける。公共交通機関の中なのだ。政治的アピールは見たくない人がいるかもしれない。

ふと「犀の角のように一人進め」というフレーズが脳裏をよぎる。春に韓国に住む友人が高麗美術展にゆき、遺物に書かれていた言葉の現代語訳の写真を送ってきてくれたのだ。ハングルを一所懸命訳してから、僕はそれが『スッパニパータ』に記された

釈迦の説法の一部であることに気付いた。「獅子のように恐れず進め／風のように捕らわれず進め／犀角のようにひとり進め」。唱えやすいように短くして、何度か口ずさんでみる。

列車はソデムン（西大門）駅を通り過ぎる。日本の朝鮮総督府がああ悪名高い西大門刑務所をつくったところだ。カンファムン（光化門）駅に着くと、自分が猛烈に怖気づいていることに気付く。住んでもいないのに韓国で政治集會に参加するなど、無謀もいところではないか。しかも、言葉が通じないのにビラまで撒こうとしている。

なんとか元氣を出してスマホで「少女像」の場所を調べ、検索結果で指示された通り、2番出口に向かう。日本大使館への角を曲がると、もうすでに路上に人が集まっているのが見える。大きな道を、ちょうど日本大使館の真横で閉鎖してステージを設置し、「安倍糾弾ろうそく文化祭」を準備しているのだ。近づいていくと、ステージではリハーサルが行われていて、右手のビルの前のスペースに早くからやってきたと

思しき参加者の人たちが集まっている。

出迎えなどはない。とりあえず、ビルの前の植え込みの陰で荷を下ろす。ポスターを立てかけ、ビラの入ったトランクを開く。周りは年配の人ばかりだ。少し離れたところで、集會に参加するのか、大学生くらいの人たちの団体がアピールの練習をしている。誰も話しかけてはこない。もつとも、話しかけられても僕の韓国語で対応はできない。やれやれ、行き当たりばったりは僕のスタイルではあるのだけど、これはさすがにちよつときつくはないか。1000枚のまだ折っていないビラを見て、僕はため息をつく。

一週間で3千名の署名が集まった

ことの発端は、もちろん安倍政権だ。7月の下旬、安倍政権が次々に韓国を敵視する政策を打ち出していたとき、僕は韓国在住の日本出身の人たちが自分たちの声明を準備しておられるのに加わった。韓国で日本出身者が安倍政権に反対するというのは、日本政府を批判しつつ、日本とつながりのある自分たちの存在を受け入れてほしいと訴える必要もあるという点で、日本で活動するのは違った難しさがある。

家事や育児、仕事などで忙しい在韓の人たちと一緒に、声明を日韓英の三か国語で

用意し、賛同を募り、一般に公開する。そこまでは順調だった。驚いたのは、韓国でネットに公開した後の反応だ。「まず自分の国のことを心配しろ」「我々は植民地支配の歴史を忘れない」「日本人と一緒にするな」…もつともだとしか言いようのない、しかし表現を練りに練った声明をほとんど読まずに書いたと思われる韓国語のコメントが並んだ。僕が期待していたような「共に頑張りましょう」というようなコメントはごく少ない。これは、かなり多様な人々に関心を持つ事態になってきたな、という



日本語のバナーを持ってアピール（筆者は左から2人目）

のが僕の印象だった。ここ20年くらいの韓国社会の対日関係とは明らかに違っている。

けれど、僕の実感には日本社会には共有されなかった。リベラル派の知識人からも「日韓双方に問題がある」というような発言がされるのが普通だった。8月のはじめ、問題意識を共有していた何人かで声明文を用意することにした。韓国大法院の「徴用工判決」をきっかけに作られた日韓の対立においては、非は全面的に日本政府にあるというのが僕らの認識だ。日本に蔓延する韓国・朝鮮への蔑視や偏見にも触れ、日本人、在日コリアン、日本に住んでいない人などすべての立場を包含する「日本にかかわりを持つ市民たち」という名前で発信することにした。

再び驚かされたことに、仲間たちがメーリングリストに流すと、多数の反応があった。実は、僕は声明を公開した直後に、夏季の短期語学研修のために韓国に旅立っただが、ソウルから確認すると、署名は1週間ほどで2000件を超え、3000件に迫る勢いになっていた。韓国と日本で、立場や表現の仕方は違うけれど、日本政府への怒りを持っている人がたくさんいるのだ。これを共有するのが僕の仕事ではないのか、そんな考えが浮かび始めた。

親切的なアジソン（おじさん）

そのおじさんが声をかけてくれたのは、A3サイズのビラを冊子体に折る作業をひとしきり進めた頃だった。もつとも、韓国の数え方ではもう50歳になる僕に「おじさん」と呼ばれても困るだろう、たぶん60代くらいの元氣な韓国人の男性だ。ポロシャツとチノパンというファッションといい、集会に少し早めに来るところといい、韓国語での呼びかけに僕が不要領に答えていると、おじさんは「日本人か？」と言い「これわかるか？」と自分たちのビラを見せてくれる。「ウリヌン イルボン クツミニ」（私たちは日本国民ではなく、安倍と安倍政権を糾弾するのだ）何とか読める。「ネー、アラッスミダ（はい、わかります）」と答えると、おじさんは僕たちのビラを読み始める。韓国在住の人たちが苦勞して訳してくれた韓国語版と日本語版の声明を両方掲載したビラだ。

目を通し終えたおじさんは、僕に握手を求めてくる。「これ、いいじゃないか」みたいな感じ。そして、おもむろに何枚か手に取って折り始める。ああ、と僕は納得する。気に入ったらすぐ支援してくれる。こういう人、日本の左翼にもいっぱいいる。気がつくとおじさんは仲間の人たちを呼

び集めている。「おおい！ここに日本から来た人がいるんだ。良いことを書いてる。折るの手伝ってくれ。それから配るのも！」時間があつという間に経つ。主催のNGOのスタッフが僕を発見してくれて、アピールの打ち合わせ。在韓の仲間も来てくれて、僕の不安がかなり解消される。その間も、何人もの人がビラを折りながら話をしてくれる。「ウチのお爺さんも日本になあ」という言葉がころうじて聞き取れる。「俺は松坂慶子で日本語を覚えたんだ」という人もいる。

7時過ぎ、主催者への連絡から通訳まで、全部やってくれたMさんが到着。集会がはじまり、人でごった返している舞台前を通り過ぎて待機場所へ。舞台の上では「家族で来ました」という方が、子どもさんを変えて意見を訴えておられる。僕は途中のブースで配っていた「NO!安倍」シールを胸元に貼る。白地に描かれた「O」の部分が赤く彩色されていて、日の丸の意匠になっている。反対の名目だとはいえ、赤い丸をまとうのは何とも奇妙な気分だ。アピールは通訳を含めて約5分。自分たちの認識と意見、そして日本では訴える機会があまりないのでここに来た、ということをお話す。集会参加者のみなさんは、暖かく受け入れてくださる。終わってから、いくつ



光化門前での光復節の集会。プラカードの文字は「ノー、アベ！」

かのメディアの記者さんのインタビュを受ける。集会はデモに移る。朝鮮日報の本社前まで、僕も一緒に歩く。その後、僕らは並んで歩いていたら若い韓国人男性3人組と飲みに行く。

安倍政権を倒してこそ・・・

「先生」という言葉が耳について離れず、デモの後、宿に戻った僕は眠れなくなっ

た。そう言ったのは一緒に飲んでいた若い活動家の男性で、学校をドロップアウトした後、非正規で働きながら独学で日本語をマスターしたのだという。今は非正規労働者の組合の中心になっている。仲間のお二人も自動車工場と教育の現場で活動している労働者。日本の状況はどうなのか、なぜ安倍政権が支持されるのか、ということをお聞かされて、僕も一所懸命に話す。

僕が大学の非常勤講師を職業にしていることを知って、(そしてたぶん年上だから)彼らは僕を「先生」と呼んでくれる。だけど、と僕は心の中でつぶやく。本当の先生はあなたたちなんだ。決して楽でない生活の中でしつかり学んで、しんどい仕事のうえに組合活動もして、政治でもちゃんと結果を出している。僕などは声明文を読んだだけだ。

夜明け前、僕は何とか自分と折り合いをつける。安倍政権を倒す。そうだと初めて「連帯」という言葉を使える。「先生と呼ばないでくれ」と言える。ブラインドを上げると、朝の光が差し込んできた。今日も暑くなりそうだ。

(おかもと・あさや／未来のための歴史パネル展／写真提供…筆者)